

ツーリング4日目。アルタイの山々の間を降っていく。ゆっくりとした時間が流れている

Whitewater trip
in RUSSIA

ロシアの地へ。

未知なるホワイトウォーターとウォッカを求めて

私たちが早稲田大学ワンダーフォーゲル部は、「日本では体験できない激流に挑戦する」というテーマの下、2011年8月に、ロシアのアルタイ共和国を流れるKatun川でラフティングの合宿をしました。8月8日から9月2日までの4週間、約200kmに渡るKatun川のツーリングを行ない、その後、Katun川で開かれた「ロシアカップ」というラフティングの大会に参加してきました。ユーラシア大陸の真ん中から流れ出て、ロシアの大地を北上し、北極海へ流れ込むオビ川の源流であるKatun川。支流が流れ込むたびに色を変える川の水や、3つのグレード4の瀬をはじめ、各所に点在するホワイトウォーター、それを彩るウォッカなど、日本では体験できない数々の体験をしました！

Text & Photo: 大門真一朗 (早稲田大学ワンダーフォーゲル部)



ツーリング8日目のシャバッシュ（グレード4）。激しい部分を少し外してしまった

飛行機から見下ると、広大な土地が見えてきた。雲の切れ間から見える緑色の大地、その間を縫うように流れる一本の川。ロシアの雄大な自然に心が高鳴る。待ちに待ったロシアの大自然だ。

今回の合宿のメンバーは、早稲田ワンダーフォーゲル部の現役が6人（4年でリーダーの大門、3年でサブリーダーの渡部、2年生の内山・竹内・橋下、新人の福永）、大家監督、横塚アシスタントコーチ（以下AC）、コーディネーターでロシア人女性のジュナ、フーチン氏を乗せてラフティングをしたこともあるというリバーガイドのアンドレイ、同じくリバーガイドで大学生のビタリー、巨漢を誇るドライバーのアレグ、セーフティーキャックとして同行したユリーの合計13名だ。

入国～ツーリング初日(8月8日～8月11日)

ロシア入国からツーリングの序盤までは、とにかくロシアのペースだった。車での移動や入国手続き、食事のタイミング、どれもロシア人スタッフが把握していることなので仕方ないが、決められた計画に乗せられているような、ツアーに参加しているような、そんな気分がさせられた。ワンダーフォーゲル部の合宿は、自分たちの力で作り上げるものだ。食事や移動についてなど、すべてやってもらうのはなんだか気が悪い。

そして、ロシアに入国して3日目、いよいよツーリングの開始である。最初はKatun川の支流のコークサ川から。実はこれもロシア人の提案で、当初の計画とは少し異なる。

それでも川の上に出れば自由になった気がする。

時には漕いで、時には流れに身を任せる。いつものペースで下れる。ロシア人も配慮してくれて、ロシア人スタッフと現役艇は、別々のボートで下ることになった。

ふと見てみると、2年生の竹内は新人の福永を川の中に突き落としている。アルタイの川の水温は夏でも10℃前後しかないから福永は「寒いっす」とか言っているけれども、顔は嬉しそうだ。そして水が好きな橋下や、寒がりの内山も川に飛び込んでいる。

そんなやり取りを繰り返しながら下っていく。そして、しばらく行くとKatun川に合流した。Katun川に合流したとたんに、コークサ川の透明な水が白く濁った。アンドレイによると、氷河が溶けた水は白く濁るそうだ。これもロシアならではの自然だ。年間降水量が日本の10分の1程度と雨が少ないアルタイだが、ここKatun川は春から夏の間、川が凍らない時期は水が豊富に流れている。それは、アルタイ山脈の湛える氷河が少しずつ流れているからなのだ。

キャンプ地に着くと、車で先回りしていたアレグと、今日合流することになっていたユリーが待っていた。これでこの合宿のメンバーが全員集合だ。それもあって、この晩は盛大なパーティーになった。

これまでの間、お互いにストレスを抱えていた。自分たちで合宿を作りたいという私たちの思いと、できるだけ良いものを提供したいというロシア人スタッフの思い。どちらも間違っているわけではないが、ぶつかってしまう。しかし、そんなストレスもウォッカが解消してくれるのだ。

食事を作っている時からどどんウォッカをついでくる。日本では、強くて癖のある酒というイメージが強く敬遠していたウォッカだが、ひとたび飲んでみると意外とすっきりしている。外の寒い空気と熱いウォッカは最高に合う。気分もだんだん良くなってきて、みんなはしゃいでいる。普段はあまりお酒を飲まない橋下や竹内も良く飲み、一生懸命ロシア人と話している。ロシア語は片言だが、同じアウトドアをやる者として、話を通じしてしまう。

ツーリング2日目(8月12日)

この日の行動は、ひたすら漕ぐだけだ。激流Katun川も、最初の2日はほとんど瀬がない。少しすると、漕ぐことにも半ば疲れて、皆だんだんと無口になっていく。そういう時はのんびりとするに限る。写真を撮ったり、川の中に入ったり、時にはボートの上で横になってみたり、川の上ではいろいろな楽しみ方がある。

中間地点であるチュングル村に到着すると、バックキングを行なった。ここから先は車が入れない地域のため、ボートに食料と生活道具を詰めなければならない。バックキングを終えると再出発だ。もの凄く重い。果たしてこんなボートを本当に操作できるのだろうか。そして、ここからはホワイトウォーターも出てくるため、不眠ではあるが、私たちのボートにはガイドとしてビタリーが乗ることになった。

この日はふたつのホールに突っ込んで、Katun川のホワイトウォーターに初めて触れた。ふたつとも迫力十分で、翌日に控える最初のグレード4

のアクテムに期待が膨らむ。

ツーリング3日目(8月13日)

今日はいよいよアクテムだ。グレード4の瀬が3km程にわたって断続的に出てくる場所で、日本での調査段階から警戒している場所だ。緊張からか会話は少なく、漕ぎ合わせる「いち、いち」という声が響いている。あつという間にアクテムの手前に来てしまった。

打ち合わせ通りにスカウティングを行なう。皆の顔に少し緊張の色が見える。皆で危険箇所、ラインの確認を行なう。

いよいよ瀬に挑戦だ！ ビタリーが指示を出し、それをリーダーが伝える。最初の瀬は無事に通過した。しかし、アクテムの核心部に差し掛かったところで大波がボートを襲った。後ろにいるリーダーまで頭から水をかぶり、前が見えなくなった。一瞬、フリップしたかと思った。しかし、フロアに一杯水を溜めこんだものの、なんとか浮力を保っている。

こうなったら漕ぐしかない。重く、全然進まない。それでも大声を上げながら必死に漕ぐ。テンションもだんだん高まり、互いに声を掛け合いながら進んでいく。そして、無事に核心部を抜けることができた。瀬を抜けて落ち着いたところでボートを岸に着け、皆の顔を見てみると、核心部を抜けたことで緊張が緩み、そして瀬の迫力でテンションが上がり、口々に感想を言い合っている。

その後は大きい瀬はあったものの、核心部ほどの迫力はなく、身の危険を感じることはなく、楽しめた。それにしても、このあたりは凄く景色が良い。川の水はエメラルドグリーンで川の両岸には絶壁がそびえている。そして抜けるような青空が広がっている。ゆったりとした流れと、スケールの大きな自然。なんだか時間の流れがゆっくりしているようだ。みんなの表情もほころんでいる。

ツーリング4日目(8月14日)

この日はチューヤ川の合流地点まで下り、ツーリング前半が終了した。ツーリングの後半が始まるまでちょっとした休息だ。

アルタイは晴れる日が多くて、それから土地が広い。無数の山々や、時たま現れる草原。人の住む場所はほんの一部だ。食事もすべて焚火で行ない、水は川から取ってくる。もちろん不便はある。トイレは凄まじく汚いし、お風呂も満足なものには入れない。それでも懐の深い自然の中で生活できる時間が何よりも贅沢だと感じた。

ツーリング5日目(8月15日)

今日は一日休養！の予定だったが、ロシア人からの提案で支流のチューヤ川を下ることになった。



ツーリング初日のキャンプ地。広い台地でキャンプしていたのは私たちだけ！

チューヤ川にはグレード4の瀬がふたつもあり、大満足のツーリングになった。新人の福永も、もう一度下りたい！と大絶賛。しかし疲れも溜まっているし、1本だけで終わりにした。

ツーリング6日目(8月16日)

今日からツーリングの後半だ。後半の始まりも単調な流れ。ここらへんまで来ると水が真っ白になっている。全行程を通して一番白いだらう。時折見えてくる集落はどれも非常にぼろく、またその周辺には放し飼いの牛や豚が水浴びをしている。長閑な風景だ。

途中メンバーを入れ替え、2艇で競争をした。また、翌朝に東京に戻る横塚ACに漕ぎ方などを指導してもらおう。そんなことをしていると、10km余りの行程はあつという間に終わってしまった。

キャンプ地に着くと休憩だ。アルタイは今日も晴れている。残り時間は昼寝をしたり、本を読んだり思い思いの時間を過ごす。

リーダーとサブリーダーのふたりで横塚ACへのお礼の品を買いに行く。車の中でジュナとアンドレイが怪しいとか、ロシア人がチャらいとか、そんな話をした。プレゼントには、こじんまりとしたスーパーでウォッカとおつまみのヒマワリの種を買った。

もちろん夜は宴会だ。ウォッカが次々に空になる。横塚ACをはじめ、皆たくさん飲んでいる。腕相撲をしたり、歌を歌ったり。誰もいない場所だからこそ、好きなだけ盛り上げられるのだ。

ツーリング7日目(8月17日)

横塚ACを送り出すと、早速ツーリングを開始する。ラフティングもここからクライマックスだ。今日はイルグメンスキーというグレード4の瀬と、カドリンというグレード3の瀬が4kmにわたって連続する場所を下る。

出発して15kmは瀬のないところが続いている。景色を楽しみつつ、漕ぎ合わせもしながら下る。イルグメンスキーからはワンダーフォーゲル部の現役員員だけでボートをコントロールすることになった。どうやら今までの私たちのパドリングが、ロシア人ラフターにも認められたようだ。

イルグメンスキーに着いた。グレード4の瀬を自分達の操船で下るのは初めてだ。ひとつひとつのウェーブがでかく、高さ4mくらいのももある。話し合いながら慎重にラインを決める。

そして出艇。決めたラインに突っ込む。約200mの瀬だが、次々にウェーブが襲い掛かってくる。ちょっとボートの向きを間違えるだけでフリップしそうだ。それでも、激流に怯むことなく漕ぎ抜けるバウの2年生・竹内と内山、竹内の後ろでしっかりサポートしている渡部、ラフティン

グを始めてわずか3カ月でここまで来てしまった新人の福永、そしていつも私の横で一緒にラフトをコントロールする2年の橋下と、この6人なら大丈夫だ。思い通りのラインを漕ぎ抜けることができた。

アクテムに引き続き、イルグメンスキーもクリア！ まさしくグレード4を自分達で漕げた。グレード4を自分達の手で漕ぐために、ずっと練習をしてきたのだ。ずっと思い描いてきたことが出来た！ メンバーも大満足の表情。

イルグメンスキーが終わり、束の間の休息となる。流れが穏やかになり、まわりの景色を楽しむ余裕が出てくる。こういうところはゆっくりとできて心が穏やかになる。

カドリンは1時間漕ぐと現れた。アンドレイ率いるロシア人+監督艇に先行してもらい、私たちは後ろからついていく。グレード3は日本でも下り慣れているし、かなり楽しい。次々に来る大きいウェーブを漕ぎ抜けていく。

こんなにたくさんの瀬があるなんて、何とも贅沢、とが言いながら下っていると、いきなりボートが横になり、川の中に投げ出された。フリップだ！ やってしまった。大きいウェーブに揺られて、長く流されては危険だ。

なんとか全員ボートに上がり、リカバリーできた。荷物の被害も少なく、おやつのリゴだけだ。荷物をしっかり止めていたおかげかな。しかしこのフリップでみんな疲れてしまったようだ。特に新人の福永は顔が青い。急いでキャンプ地に向かった。

キャンプ地に着くと、やっとひと息つけた。ジュナがおやつのスイカを切ってくれた。渡部はすかさず手伝っている。切ったスイカを食べ、温かいお茶を飲むと、エネルギーが染み渡っていくのを感じる。

夜はご飯を食べながらビデオを見る。ボートの後ろに飯り付けていたGoProが見事にフリップの瞬間をとらえていた。でもラフターならフリップしてなんぼ。このフリップ動画を酒のつまみにする。そして翌日のシャバッシュ(Shabash グレード4)に備えて早めに就寝。

ツーリング8日目(8月18日)

天気は快晴。ツーリングの最中に晴れが続くと本当に気持ちが良い。朝食を済ませ、出発！ シャバッシュまでにも大きな瀬が幾つかあるが、今日は安全運転を心掛ける。

シャバッシュに到着し、スカウティングしてみると、思っていたよりも大きい。ズドーン、ズドーンという凄まじい音を立てている。突っ込めば間違いなくフリップするだろう。メンバーの疲れも考えて、慎重にラインを決める。



合宿中の食事準備はすべて焚き火で行なった。焚き火を囲みながらの夕食、そしてウォッカ



行動が終わったあとのひととき。昼寝をしたり、本を読んだり、ゆっくり休める時間だ



ツーリング5日目に下った支流のチューヤ川。グレード4の瀬での1枚。アルタイには未知の激流が無数にある！ 右の前から2番目が監督、左の前から3番目が横塚 AC

ボートに乗り込み出発。だんだん瀬の音が大きくなり、緊張も高まってくる。打ち合わせ通りに進んでいくが、少しチキンルートに寄りすぎて、巨大ホールからそれて、フラットな部分を行ってしまった。少しもったいなかったか！ 激流が大好きな内山や、橋下はちょっと残りそうだ。

シャバッシュを超えると、穏やかな流れとなる。途中ブーテン氏の別荘(?)を横目に見る。このあたりは本当に穏やかで、流れに身を任せるだけだ。長かったツーリングもあと少し。大きい瀬はすべて下ってしまった。所々に瀬があり、その他は瀬場が続いている。瀬ではポジションを変えて楽しむ。福永は後ろのポジションに挑戦、橋下は念願の前を漕ぐ。川の左右からは次から次に支流が流入している。周りには道路も人家もなく、もちろん護岸工事もされていない。昔からの川の姿そのままだ。

もう何日も漕いでいるせいか、リラックスしている。ロシア人とも程よい距離を保つことができるようになってきた。そして最終夜だ。ウォッカで乾杯をする。本当はお疲れ様を込めてゆっくり話したいが、疲れていることもあり、皆すぐに寝てしまった。

ツーリング最終日(8月19日)

9日間にわたったKatun川ツーリングも、とうとう最終日、ゴールに向かって漕ぐのみだ。残りの行動時間を惜しむ気持ちと、早く終わりにして休みたい気持ちがせめぎ合っている。

結局皆の中では、速くゴールしたいという気持ちが勝ち、自然と漕ぎが速くなる。漕いで漕いで、

ついにゴール！ ゴール地点にはアレグが待っていた。ボートを浜辺につけて、アレグの下に向かう。お馴染みの優しい笑顔で迎えてくれた。

ゴールに着いたので式典を行なう！ 部旗を取り出し、準備を整える。エールと、それから早稲田大学校歌を歌い、思う存分ロシアの地に早稲田ワンダーフォーゲル部の名をとどろかせた。こういう場所で校歌を歌うのは良いものだ。合宿で校歌を歌うたびに、ちょっと感動してしまう。そして、4年生の私にとってはこれが最後の式典なのだ。

●
原始のそのままの姿を残しながら、アルタイの地を滔々と流れるKatun川でのツーリング。そこにある自然をちょっとずつ分けてもらいながらのキャンプ。アルタイの自然、Katun川の激しい瀬の数々。そしてウォッカに彩られた夜に、ジュナやアンドレイといったロシア人との交流。いろいろ

なことが脈絡なく思い出される。

ここまで一緒に来てくれた現役部員6人には、本当に感謝したい。辛かったことも、それからいろいろの不満もあつただろうけれども、ここまでついてきてくれて本当にありがとう。そして、サポートをしてくださった部長先生、監督・コーチをはじめOB会の方々、本当にありがとうございました。

*追記：このツーリングの1週間後に行われたロシアカップに出場。6人乗り男子の部で、12チーム中11位という結果に終わりました。なかなか厳しい結果ですが、これをきっかけにさらなる高みを目指したいと思います。それと同時に、日本とは違った、ロシア人の大会を体験できた点では良い経験になりました。

この参戦記は日本ラフターズ協会のHP (www.japanrafting.org) にレポートとして載せてありますので、是非ご参照ください。



カヤッカーのユリー。カヤックの腕はワールドクラスで、イジられキャラ。大人気だった



ゴール！ 左から渡部、アンドレイ、大門、橋下、竹内、アレグの息子(なぜか登場)、内山、福永